通　信

世界陸上大阪大会観戦記

Report at Osaka World Championships

田中　悠士郎

Yujiro Tanaka

IAAF世界陸上競技選手権

IAAF世界陸上競技選手権（通称：世界陸上）とは、国際陸上競技連盟（IAAF）が主催する大会であり、第１回大会は1983年にヘルシンキで開催された。開幕当初、４年に一度の開催であったが、1991年の東京大会以降は２年に一度の開催となり、リアルタイムに世界一を決める舞台になったといえる。世界陸上は、年々規模が増大している。今回の大阪大会では、過去最多となる212の国と地域から選手及び役員が集まり大会を盛り上げた。

また、世界陸上では規模ばかりでなく、高いパフォーマンスによる戦いが繰り広げられており、過去に18の世界記録が誕生している。その中でも、1991年に開催された東京大会でのC.ルイスの活躍は陸上界だけに留まらず、日本中を感動と興奮で満たしてくれた。

そして世界陸上も今大会で11回目を迎え、1991年の東京大会以来実に16年ぶりの日本開催となったのである。（資料1）

世界陸上日本開催

世界陸上大阪は、8月25日から9月2日までの９日間で行われた。参加国数ばかりでなく、約190カ国で放映されたことにより、延べ65億人の観衆が注目する大会となった。

資料１　IAAF世界陸上競技選手権開催地及び参加国

	開催年	開催地	開催国	参加国･地域
第　1　回	1983	ヘルシンキ	フィンランド	183
第　2　回	1987	ローマ	イタリア	157
第　3　回	1991	※東京	日本	164
第　4　回	1993	シュツットガルト	ドイツ	187
第　5　回	1995	イエテボリ	スウェーデン	191
第　6　回	1997	アテネ	ギリシャ	198
第　7　回	1999	セビリア	スペイン	202
第　8　回	2001	エドモントン	カナダ	189
第　9　回	2003	パリ	フランス	198
第　10　回	2005	ヘルシンキ	フィンランド	196
第　11　回	2007	※大阪	日本	212(見込み)

写真１　会場風景：ホームストレート・ゴール付近

国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科（Graduate school of Sport System, Kokushikan University）

私が世界陸上を観戦するのは、1991年東京大会以来２度目である。当時は７歳であり、ただ「お祭りみたいな大きな大会だ」という印象しか残っていない。しかし、男子走幅跳のM.パウエルとC.ルイス（USA）の壮絶な争いに関しては鮮明に覚えている。

この大会でM.パウエルは、８m95cmの世界記録を樹立した。C.ルイスも追い風参考記録ではあるが、M.パウエルに４cm迫る８m91cmという当時の世界記録（1986年メキシコオリンピックにおいてB.ビーモンが標高2400Mで追い風２Mという好条件下で樹立した記録）８m90cmを上回る結果であった。この世界記録は16年後の現在でも破られておらず、陸上競技界の歴史に残る名勝負であったと言える。

写真２　会場風景：スタンド側

世界陸上への関わり

私は、大学卒業前から大阪世界陸上をただ観戦するだけでなく、何らかの形でこの大会に貢献したいと思っていた。本大会では、幸運にも海外のスポーツメーカーからオファーを頂く事ができ、アシスタントとして間接的に大会に関わる事が出来た。

各スポーツメーカーは、選手達のサポートを行っている。それは、競技場外（今回の場合、選手村近から近くに位置する大阪駅付近や道頓堀周辺）に選手をサポートする為だけの場として設置され、「ホスピタリティールーム」と呼ばれる場所である。ホスピタリティールームでは、記者会見の会場、選手がリラックスできる様に食事やテレビ、ソファー等が設置された一室がある。

私の仕事は主にホスピタリティールーム内で選手やその関係者達のサポートを行うという内容であった。例えば記者会見を行う選手の送迎や気分転換の為に「映画館に行きたい」という選手に映画館の場所や道のり、上映中のタイトル、タイムスケジュール等を調べるなど、実際にトップアスリート達と言葉を交わし、身近で過ごすことができた。私がサポートした選手の中には、金メダリストを始めとするファイナリストもいた。ホスピタリティールームを通じて、世界陸上の舞台裏を体感できた。

観戦記

午後のセッションは仕事が無かった為、実際にスタジアムまで行き、観戦することができた。特に注目種目の１つである男子100mの決勝では、会場に多くの人が押し寄せていた。ほんの10秒で世界一がきまるその瞬間を見るために・・・

その100mには、二人の選手が特に注目されていた。世界記録保持者のA.パウエルとそのパウエルに迫る勢いのT.ゲイの戦いである。100mは一次予選、二次予選、準決勝、決勝と勝ち上がらなければならない。決勝まで勝ち残るだけで難しいこの種目で、予選から準決勝まで一度もパウエルとゲイの直接対決は決勝に持ち越された。結果は、始めに勢いよく飛び出していったパエルを後半で抜き去ったT.ゲイが最速の座を手に入れた。

大阪大会での注目選手を少し取り上げてみる。A.パウエルとT.ゲイに加えて、400mのJ.ウォーリナー、110mハードルの劉翔、 女子棒高跳のE.イシンバエワ、女子5000mのM.デファー、女子10000mのT.ディババ、女子七種競技のC.クリ

ュフトである。世界記録はでなかったものの、この注目されていた選手の大半が優勝し、高いレベルの記録で会場にいる観客を魅了した。そこで、疑問が浮かび上がった。『何故、 彼らは強いのだ？』と。世界記録や優勝が当り前だと周りから騒がれているにも関わらず、素晴らしいパフォーマンスで勝利を勝ち取っている。きっと、彼らは凄く身体能力が高いだけでなく、精神的にも他の選手よりも上だったのであろう。私はそんな事を思いながら、一ファンとして大会を思う存分満喫した。

写真３　開場風景：第３・４コーナー

キング・オブ・アスリート

私は、この大学院に在学しながら競技者としても現役である。専門種目は、十種競技（デカスロン：Decathlon）である。十種競技は、日本であまり知られていないが、欧米では大変メジャーな種目である。十種競技の勝者には「キング・オブ・アスリート」として称えられるほどだ。

十種競技とは、陸上競技の中の走・跳・投の分野に渡る10種目を一人の選手が２日間に分けて行うという過酷な競技であり、それら10種目の記録が得点化され、合計点で順位を競う競技である。

今大会の10種競技においては、連日猛暑で決して良いコンディションとは言えない中で行なわれた。しかし結果は、13人もの選手が8000点を越える（2006年世界ランキング22位相当）というハイレベルな戦いが繰り広げられ、これは前回のヘルシンキ大会を上回る結果となった。

私は、初めて世界の10種競技選手のパフォーマンスを間近で観戦することができ、とても興奮した。物凄い肉体を持った大男達が２ｍ超えるバーを軽々とクリアーする姿や、会場中に響き渡る大きな喚声に加速された“やり”は、いつも見ている視界のはるか上で見たこともないような大きな放物線を描いて飛んでいった。本当に何が凄いかを言葉で表現するのは難しく、すべてが桁外れという感じであった。

そして、私が一番感動した姿は、最終種目の1500ｍをフィニッシュした瞬間に飛び込んできた。それは、選手全員から溢れ出す「達成感」の笑顔であった。彼らはスタンドの声援に応え、母国の国旗を高らかに掲げた。その姿を目にした私は、身体の底から熱いものが込み上がってきた。スタジアム中の観客や競技役員までもが、スタンディングオーベーションで選手を称え、その拍手は鳴り止むことなく、私も無我夢中で選手を称えた。その時、10種競技という自分の専門種目の素晴らしさを改めて体感した。

写真４　十種競技　田中宏昌選手

最後に・・・

今回の大阪世界陸上では、観戦して満足できたのはもちろん。それ以上に大会に間接的ではあるが関われた事で、より一層この大会が満喫できた。なかなか、こういった国際大会があるわけではない、貴重なひと時を過ごせた事にうれしく思う。これまで、大学・大学院でいろいろな事を学んだ。その学んだ成果がこの大会で活かせたと実感し、自信がついた。また、大阪世界陸上での経験は、自分自身を一まわり大きくさせ、大変充実したものだった。

参考資料

大阪世界陸上オフィシャルホームページ
http://www.osaka2007.jp/index_j.html

IAAF国際陸上競技連盟ホームページ
http://www.iaaf.org/